

埼玉県退職校長会 会報

題字・石田孝作
第169号
令和2年4月

震災の中で大きくなった子どもたち

埼玉県退職校長会 副会長 関 口 靖 彦



「復興の仕事をしたい。人を助ける仕事をしたい」
華やかな振り袖で満面に笑みを浮かべている女性たち、ネクタイでビシッと決めた男性たち。テレビから流れてくる映像は東日本大震災の中で力強く生き抜き、令和初の成人式を迎えた若者たちの喜びを映し出していた。

あの日、寒さと恐怖にふるえながらインタビューにやっとの思いで答えていた痛々しい子どもたちを思い出す。私は、この先この子どもたちはどうなっていくのだろうと胸が震えたことを思い出した。翌年、私たちNPO法人教育ルネッサンスは壊滅的なあの環境の中で、何をしたらのだろう。家族は元氣だろうか。友人は生きているのだろうか。次から次と湧いてくる気持ちを抑えきれなくなった。そこで、被災に会った子どもたちの現状を多くの人に知らせ、少しでも激励や支援ができたらと考え、それをメッセージという形で求めたのだった。大人でさえつぶされそうに不安、悲しみ苦しみは、彼らには辛すぎるのではないかとドキドキしながら待っていた。ところが、どうだろう。彼らは1200を超えるメッセージを届けてくれたのだ。命がけでガレキをかき出し、冬の海に入り行方不明者を探す人々や子どもたちを喜ばせたいと温かいお風呂まで作ってくれた自衛隊の方々の必死の作業があった。子どもたち

- ① 巻頭言
- ② いまを生きる
- ③ 一人一言
- ④ 長寿会員
- ⑤ 物故会員
- ⑥ 研究調査報告
- ⑦ 文芸

は、それらの働き振りに気がつき、人々の優しさに「ありがとう」と心から感謝するようになった。更に、子どもたちは、今度同じようなことが起きたら絶対

先人に学ぶ「今こそ郷土愛を!!」

大里支部長 新 井 俊 一



K市教育長室。書棚の一角に、「先人に学ぶ」というファイルがある。

私もN教育長の「先人に学ぶ」に習い、所感を述べていきたい。

先人の筆頭は、顧問・栗原喜一郎先生である。ある時、こんなお話をされた。

「現代の教育でいちばん欠けているのは郷土愛である。『彩の国教育の日』を提唱したのも、『地区別教育推進協議会』

対自分が恩返しをしようと思いをメッセージに誓った。復興を願っているその人が、その言葉を前向きな大人へ継いでいく。

子どもの時に誓ったメッセージが成人式を迎えた今も変わらないことはなんと凄いことだろう。幼い記憶が多くの大人たちに守られながら育っていた。

学校、家庭、地域は今では大きな財産を守っている。

を企画したのも、根底は郷土愛の育成を意図したものである」と、力強く語って下さった。

二人目は、「北足立南部支部会報第52号」の巻頭言執筆の副支部長・南勇先生である。先生は、「教師は風の人。土の人が育んだ子ども達を更により良い方向に導いていく。これが、風の人と土の人の融合である。退職校長は、自ら、教育を地域の中で一層発展させていく発火点にならないなければならない」と結んだ。

先生の主張に得心した私は、教育推進協議会の挨拶

で、「本会は、風の人と土の人が出会う場所。共に大里のより良き風土を作っていくのではないかと、参会者を激励した。

そして三人目は、大里地方教育推進協議会で提案をされた小池博先生である。テーマは「郷土を見つめて」。先生の一連の活動報告は、大変ドラマチックであった。

正に「土の人」と呼ぶに相應しい生き方をされている姿に、「定年後は、こう生きたいものだ」という賞賛の声が出席者から多く寄せられた。

以上、「三人の先人」の方々のご発言、会報巻頭言そして支部別研究協議会の提案から、多様な「郷土愛」の姿を知ることができた。

結びに、ここに取り上げた「三人の先人」に共通に見られるスタンスを以下のようにまとめた。

「課題解決で大切なことは、将来に自分を置き、そこから線を引き、現状を見る力を持つておられる」と。即ち、「温故知新」ならぬ、「温故知新」を常に心がけておられることも分かった。

小論が本会の課題解決の一助となれば幸いである。